

なお糖尿病治療中の入所者に関して、HbA1cの5年間の推移も追跡調査した。

【結果】①非糖尿病群のHbA1c値・CPI値はいずれも全年齢において正常範囲内にあり、加齢による耐糖能の低下は認められなかった。②非糖尿病群と比べると糖尿病群のHbA1c値は平均1.5%程度高くCPI値は平均1.4低かった。③糖尿病治療群のHbA1cは、入所時に比べ、入所後次第に改善し、入所環境（医療スタッフ、管理栄養士の関与による規則的な食事、生活）によるものと思われた。

【結語】従来言われてきた加齢による高・超高齢者の耐糖能低下は今回の検討では明らかではなく、少なくとも介護施設入所者においては、治療も、一般患者と同様に考えてよいと思われる。

#### 4 膵臓癌術後、片手でインスリン自己注射を覚えた患者を通して

石澤 真帆・塩入めぐみ・目黒理恵子  
殖粟 加代・外山 幸子・丸山 順子  
阿部 孝洋・八幡 和明

長岡中央総合病院糖尿病センター

障害のある患者に、様々な支援の方法と工夫により自己注射が可能となった症例を経験したので報告する。68歳、女性。膵臓癌のため膵体尾部切除術施行。術後食前血糖値は著名な高血糖を認め、尿中CPR低値のためインスリン注射が必要と判断された。しかし、19歳で左上肢を切断しているため全く動かすことはできず、両眼網膜症による視力障害もあり自己注射は困難と思われた。そこで、ペットボトルを使用し、右手だけでインスリン注射器が操作できる補助具を作成。また注射器のクリック音で単位合わせができるようデバイス変更を行うなどの支援を行った。患者の前向きな気持ちも後押しし、片手でのインスリン自己注射が可能となった。障害のある患者に療養指導を行う際、患者、医療者ともに目標を低くし諦めがちであるが、患者の思いを聞き、医療者が諦めず患者の残された機能に注目しサポートし

てゆくことで、患者の治療意欲を引き出すことにつながると思われる。

#### 5 Klinefelter 症候群が疑われ高度なインスリン抵抗性を示した糖尿病の1例

矢田 雄介・細島 康宏・金子 佳賢  
風間順一郎・鈴木 芳樹\*・成田 一衛  
斎藤 亮彦\*\*

新潟大学医歯学総合病院第二内科  
新潟大学保健管理センター\*  
新潟大学機能分子医学講座\*\*

症例は31歳、男性。広汎性発達障害、停留精巢の既往あり。X年7月12日に空腹時血糖248mg/dl、HbA1c(NGSP)9.1%で糖尿病と診断された。糖尿病による合併症は認めなかった。身体所見で女性化乳房や陰茎・睾丸の未発達を認めた。検体検査では尿中Cペプチドが432.5 $\mu$ g/日と高値で強いインスリン抵抗性の存在が示唆された。

【経過】総テストステロンが209.9ng/dLと低値でありLHが8.7mIU/mL、FSHが38.3mIU/mLと高値を示したことから原発性性腺機能低下症と考え、Klinefelter 症候群を第一に疑ったが染色体は正常であった。

【考察】Klinefelter 症候群は否定されたが、その次に停留精巢が性腺機能低下の原因と考えられた。過去にも男性の原発性性腺機能低下症に伴ってインスリン抵抗性が增大していた糖尿病症例の報告があり、テストステロンの低下がインスリン抵抗性に影響していると考えられている。

【結語】性腺機能低下症が著名なインスリン抵抗性に繋がったと考えられた2型糖尿病の1例を経験したので報告する。